

愛知県がんセンター中央病院地域での取り組み

愛知県がんセンター中央病院 立松三千子

愛知県がんセンター中央病院では、保険薬局（以下、薬局）11軒と連携し、4診療科17名の医師の協力を得て、「プロトコールに基づく経口抗がん薬治療管理の効果を実証する調査」を開始した。平成29年10月30日に1例目、以後、平成30年2月16日までの約3か月半で18例が登録され、テレフォンプォローアップ回数は37回、介入件数は、45件であった。

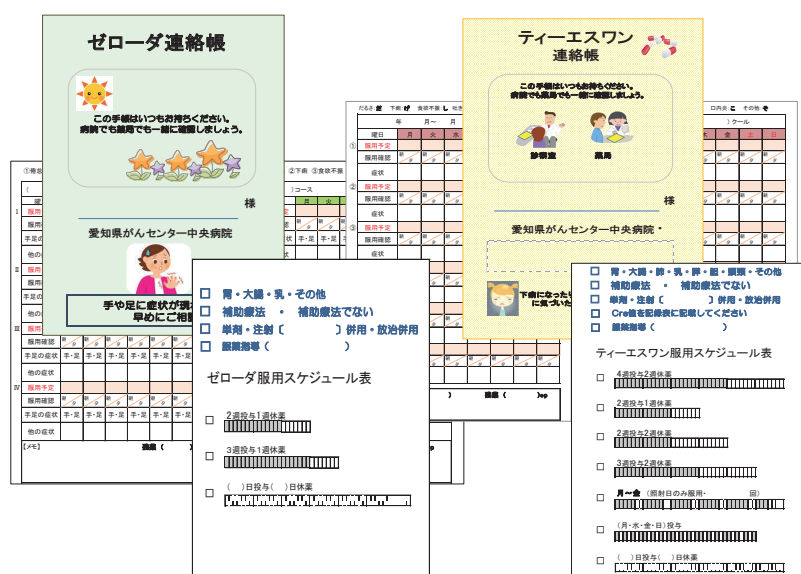
今回、この取組を通して、病院と薬局の連携、薬局での積極的な患者サポートが、いかに患者の安全ながん治療に貢献できるか再確認することとなった。また、テレフォンプォローアップの手順書などを共有することで、広い範囲の薬局と指導内容統一に向けた第1歩が踏み出せたということも、大きな成果と考えられる。

1. 11軒の薬局との連携

当院では、平成24年1月より、医師、看護師、病院薬剤師と薬局薬剤師との顔の見える関係を目指した「医看薬薬連携研修会」を開催してきた。多い時には30名ほどの薬局薬剤師の参加があり、情報交換を行ってきたが、その研修会の席上で今回の取組を紹介し、参加を呼び掛けた。病院門前ではなくがん患者の来局が少ない薬局であっても是非にと参加希望された結果、広範囲に協力薬局を登録することができた。

患者が薬局を選択するため、薬局の所在地、地図、最寄り駅などの情報を1ページ1薬局としたファイルを用意し、そのファイルを参考に患者が薬局を選択した。掲載薬局は、名古屋市内の広い範囲に亘っていたが、最終的には、当院最寄駅前の薬局が1軒、門前薬局3軒の計4薬局が選択された。

今回、医師から紹介のあった患者のうち、かかりつけ薬局が地元であり登録できなかった患者が3名、かかりつけ薬局では処方された抗がん薬の取り寄せが間に合わないという理由で門前薬局を選択された患者が2名であった。かかりつけ薬局を希望された患者の場合は、処方された薬剤の在庫、取り寄せなどの対応については必ず確認し、事前の情報提供に努めた。かかりつけ薬局を持つ患者が増えている傾向はみられたが、やはり、病院の門前以外では、経口抗がん薬を在庫している薬局は少ないという印象であった。



情報共有ツール：病院、薬局、患者を繋ぐ連絡帳

2. テレフォンプォロアアップによる介入事例

- ① 吐き気が強いのに関わらず、制吐剤を服用されていないことが判明。制吐剤の効果の説明し、使用を勧めたことで症状の改善に繋がった。
- ② 夫の食欲不振を心配するあまり、食事をとるよう勧めることで患者の負担感が増してしまい、夫婦間に感情の行き違いが起きていた。妻に、患者の食べられない状況を理解してあげること、少しずつでも良いので食べられるときに好きなものを食べさせてあげればよいことなどをアドバイス。妻のサポートを行った結果、夫婦で一緒に治療に向き合うことができるようになった。
- ③ 吐き気も強く体調不良のうえ、下痢が頻回であることが判明。ロペラミドの服用で対応できないと判断し、プロトコルに従い、休薬するよう患者に伝えて病院に連絡。その結果、主治医の指示で緊急入院となった。家族は、病院に電話してよいかどうかかわからず不安だったとのことで、薬局の速やかな対応に感謝された。
- ④ HFS 症状の聞き取りの結果、G.1 と判断。保湿剤の使用状況を確認したところ、1日1回しか使用していなかったため、使用回数を増やすようアドバイス。ステロイド軟膏の使用法についても再指導した結果、次回受診日にはG.0へ改善していた。
- ⑤ 悪心が強く食事の摂取量が以前の30%に減少していることが判明。病院に連絡した結果、休薬と近医での補液加療（自宅が遠いため）が指示された。薬局から電話をしなければ、服用を継続し、症状を悪化させていた可能性があった。

3. 副次的成果

テレフォンフォローアップを行ったことにより、患者と薬局の距離が縮まったと考えられる。なぜなら、薬剤の受け渡し時以外にも薬剤師と治療について相談できるということを患者・家族が体験できるからである。

事例：テレフォンフォローアップを行った患者から「抗がん薬を服用後に吐いてしまったが、再度服用してよいか」という電話相談があり、状況を確認するうちにS-1の服用量間違いが判明した。服用開始時は良かったが、なぜか服用期間の途中から、1回2錠のところ1錠しか服用しておらず、残薬があるため休薬期間も飲み続けるところであった。幸い、電話を受けた時点が丁度休薬期間に入るタイミングであったため、休薬とし、正しい服用法に戻すことができた。主治医に患者の状況について報告を行った。

このように、患者が気軽に電話相談できる薬局の存在意義は大きい。ある患者は「抗がん薬を飲み始めるときは怖かったけれど、薬局から電話があるのでとても安心できた」と主治医に話したことがカルテに記載されていた。

薬局に相談をしたことのない患者であっても、テレフォンフォローアップにより、薬局薬剤師がいつでも相談できる一番身近な医療者であることに気づくはずである。

一方、薬局側としても、今回使用したチェックシートや、副作用のグレード評価とその対応について詳細に記載された手順書などにより、どの薬剤師が対応しても同じように短時間で効率的に副作用チェックができるようになったと考えられる。それにより、がん患者への指導経験が少ない薬剤師であっても、がん患者に声をかけやすくなったのではないだろうか。

4. 今後の展望

今回の経験を基に、他の経口抗がん薬にも範囲を広げ、テレフォンフォローアップを継続することが望ましい。ただ、薬局の人手不足の中、いかに短時間で効率的に患者指導の行える状況を作り出すかが問題である。病院薬剤師としては、より使いやすい服薬指導ツールや副作用チェックツールなどの作成や共有を通して薬局との連携を深めていく必要がある。